
東方墮翼記

キラー

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方墮翼記

【Nコード】

N7997N

【作者名】

キラー

【あらすじ】

「とある魔術の禁書目録」の一方通行に憑依した青年は上条当麻とインデックスに昼メシを奢り、路地から自分の寮に戻ろうとすると、ノイズが走った。オカルト瞬間、そこは人間と妖怪が共存する世界「幻想郷」だった。アクセラレータ幻想郷と一方通行が交差するとき、ものがたり幻想は動き出す。

第0章 幻想（ものがたり）の始まり D e s t i n y | L e g e n d（前書き）

初めましての人は初めまして。知ってる方はお久しぶりです。

この小説はある魔術の禁書目録インデックスのキャラクター「一方通行」アクセラレータに憑依した青年が幻想入りする物語です。

ちなみに作者は東方Projectのゲームは友人のを借りて数回やった程度です。あとは、この東方二次創作を読んでいるくらいなので、原作知識はほとんどありません。

とある魔術の禁書目録インデックスの方は、小説もSSを含めて、全館持っていますし（マンガは読んでません）、アニメも見えています。

至らないことがあれば、感想、メッセージで送ってください。

それでは、東方墮翼記、始まります。

第0章 幻想（ものがたり）の始まり D e s t i n y | L e g e n d

突然だが、オレは普通の人間じゃねエ。

理由？ ンなモンキマってンだろオが。

オレは、「とある魔術の禁書目録」^{インデックス}の暗部偏の主人公（確か）、
^{アクセラレータ}一方通行に憑依したからだ。

もオ、右方のフィアンマとの戦いと第3次世界大戦は終わり、今は平和な日常が過ぎていった。

ンでエ、今オレは都市伝説にもなってやがる能力「^{イマジンプレイカー}幻想殺し」を有する我が親友こと上条当麻^{かみじょうとつま}と当麻の部屋の居候で10万3000冊の魔道書を完璧に記憶している大食いシスターインデックスに昼メシを奢っていた。

あん？ 原作とは違う？ ^{アクセラレータ}一方通行は当麻の親友じゃアねエ？
ンなの知ってらア。とりあえざアざつと説明すンと、原作開始前に当麻が不良に追いかけていて、当麻たア知らずに助けてやって、そつからコイツとの腐れ縁が始まったってエワケなんだ。余談だが、そんなときにグループのリーダー兼当麻の隣人兼陰陽師兼多重スピ^{つちみかど もとはる}の土御門元春とも仲良くなったんだよなア……。

ちなみに、なぜ当麻とインデックスに昼メシを奢ってるといって、1時間ほど前にノートパソコンを買って、30分前に「^{ヘウンキャンセラー}冥土返し」^{デバイス}ことカエル医者にチョーカー型電極のバッテリーを補充させてもらい、適当にどつかで昼メシでも食つとくかアと思った矢先に無駄に^{たけ}高エ参考書を買って金欠の当麻と腹ペコとなったインデックスに見つかつちまってエ、奢らされてるってエワケだ。

^{アクセラレータ}「一方通行、マジで助かったよ。金は絶対に返すぞ」

「ああ。別にいつでもイイかな。しかし、参考書買ってエ、オ

マエが金欠になったってエの、前にもあったよなア」

「……………仰る通りでございます」

「ねーねーあくせられーた、コレ頼みたいんだけどいい？」

「ってエ、まだ食う気かア？ 腹ペコシスター……………。いくら何でもオオそろそろ頼むのやめる。当麻より金は持ってるけどよオ、これ以上頼まれつとオ、流石のオレでも財布が薄くなっちゃうってエの」

とまア、こんなやり取りの後、当麻とインデックスたア分かれて、家に溜め込んでるライトノベルをとっと読みてエがために路地の方に入る。

……………やつばア、杖があんと路地じゃア歩きにくいぜ……………。

瞬間、雑音^{ノイズ}が走った。

どオなってるんだ？ …… チョーカーじゃアねエな。携帯電話でもゲームでも、ノートパソコンでもねエ。チツ……………面倒臭せエ事にもまアた巻き込まれちまったかア？

オレの予想は当たっていた。何故なら、路地^{……………}にいたはずのオレが明治時代より少しくれエ前の山^{……………}中の人里に^{……………}いるからだ。

———^{オカルト} 幻想郷と一方通行が交差するとき、^{ものがたり} 幻想は動き出す。

主人公設定

名前：一方通行。アクセラレータ 憑依前は片柳啓介。かたやな啓いすけ

年齢：16歳。憑依前は19歳。

性別：憑依前も憑依後も男性。

髪型：ショートシャギー。最近は髪が伸びてきている。

髪色：白。

瞳の虹彩：赤。

職業：長点上機学園生徒（書類上）、学園統括理事会直属の暗部組織「グループ」の構成員。

趣味：PCゲーム（エロゲではない）、読書（ライトノベル限定）など。

特徴：白い髪と肌、赤い瞳、ト字トンファー型の現代風の杖、首のチョーカー型電極。デバイス

所持品（幻想郷到着直後）：チョーカー型電極、ト字トンファー型の現代風の杖、ノートパソコン一式、ゲーム、携帯電話、イヤホン、お茶、拳銃、マガジン×2

能力：能力名は一方通行。アクセラレータ 体表面に触れたあらゆる「向き」ベクトルを操作、もしくは変換する能力。デフォルトでは反射となっている。幻想郷での能力表記は「あらゆる「向き」ベクトルを操作、変換する程度の能力」。デフォルトは「重力や酸素など生きるのに必要な力を除く体表面に触れたものを反射する程度の能力」。実際は反射ではなくベクトルの反転。

AIM拡散力場のベクトルを操ることで噴射状の黒い翼を発現することができる。能力名は不明。

使用スペルカード：現在8枚使用確認。

術符「求めるは焼原>>>・紅蓮」くれない：使用者の前方に魔法陣を構築し、構築された魔法陣の中心から炎の弾幕が放つ。

術符「求めるは雷鳴>>>・稲光」いづち：使用者の前方に魔法陣を構

築し、構築された魔法陣の中心から雷の弾幕を放つ。

術符「我・契約文を捧げ・天空を踊る光の魔獣を放つ」：空間に光の文字を刻み、使用者の上部から不定形な犬のような獣を放つ。弾幕バージョンもアリ。

術符「炎の女神が、我らに力を貸し フレイヤ・バースト」：印を切ることで空間を凝縮し、強烈な炎の砲撃を放つ。弾幕バージョンもアリ。

捕縛「光の王が無数の時を編み ライト・キャンサー」：印を切ることで光で編まれた網を生み出し、対象を捕縛する。

術符「求めるは光陣>>>・縛呪^{ばくじゅ}」：使用者の前方に魔法陣を構築し、構築された魔法陣から伸縮作用のある光の縄を生み出す。

疾速「我・契約文を捧げ・大地に眠る悪意の精獣を宿す」：空間に光の文字を刻み、脳のリミッターを無理矢理外すことで身体能力を引き上げる。効果が持続している際は、体が白くきらめく。

飛翔「我・契約文を捧げ・空を舞う漆黒の鳥獣を宿す」：空間に光の文字を刻み、使用者を浮遊状態にする。浮遊だけではなく飛ぶことも可能。効果が持続している際は、体が黒くきらめく。「伝説の勇者の伝説」にはない作者が考えたオリジナルの魔法（本作ではスペルカード）。

備考：現実世界からとある魔術の禁書目録^{インデックス}のキャラクター「一方通行^{ラレタ}」に憑依した青年。とある魔術の禁書目録^{インデックス}の原作知識あまり無いため、原作開始前に上条当麻や土御門元春と仲良くなったり、原作1巻に介入して当麻の記憶破壊を防いだりした（そのあと、「竜^{ドラゴン}の吐息」のベクトルを変換したが、思うように行かなかったため、当麻の体に余波のダメージが当たったため、当麻は入院）。その後は自覚無しで原作ブレイクをした。憑依前は有名な大学に入学し、アメリカのハーバード大学に留学する話もあった。勉強は得意で運動は苦手。演算能力も高度なもので一方通行^{アクセラレータ}（能力）の演算を軽くこなした。その後、いろいろあり（説明は割合させていただきます）、幻想郷に幻想入りした。

第一章 01 最強の少年と最後の希望は楽園へ……

The Imagine

更新遅れてすいません！

今回は一方通行と？^{アクセラレータ}ことチルノのバトルが後半にあります。

それでは、どうぞ。

「——おいおい、一体どオなつてンだアこりゃア？」

アクセラレータ

一方通行が驚くのも無理は無いだろう。

なんせ、路地に入り、^{ノイズ}雑音が走ったと思いきや、一瞬のうちにして彼がいた大規模な都市『^{がくえんとし}学園都市』の街並みとはかけ離れた村が今でも見えそうな山の山中の中にいるのだから。

「マジでどこなンだよ此処は……」

携帯電話を開き、片っ端から登録している電話番号にかける。

まずは親友である上条当麻に。次に魔術方面のインデックスに。^{オカルト}次は同じ理由で土御門に。

しかし、誰も電話に出なかった。よく見ると、画面には“圏外”と表示されていた。

「まア、こんな山ン中だしな。通じねエのは当たり前か」

アクセラレータ

一方通行は携帯電話をズボンのポケットにしまうと、辺りを見渡す。

周りにあるのは森、森、森、森、森ばかりだった。

（オイオイ……流石に森ばかりはねエだろオが——）

アクセラレータ

瞬間。一方通行は先ほどまでは感じなかった気配を感じた。

アクセラレータ

一瞬、人間だと思い込んだ一方通行だが、人間とはまるで違う気

配を感じた。

「……何だアこの気配は。明らかに人間の気配じゃねエな。……、魔術師と似てるんだがなア……。出てきやがれエ！ オマエ、ナニモンだア？」

刹那、冷氣が一方通行を襲う。

同時に一方通行は首のチョーカー型電極のスイッチを押し、日常生活を送ることを前提にバッテリーを3日まで消費する通常モードから能力使用を前提にバッテリーをフル稼働で消費する能力使用モードに変更する。

以前は通常モードで2日、フル稼働で30分だったが、現在は一方通行が所属する学園都市に存在する暗部組織『グループ』とカエル医者^{タイムリミット}の技術によって貯蔵可能なバッテリーが増加したため、能力使用モードでは1時間という制限がありながら、能力を使用することができる。

そして、一方通行は冷氣のベクトルを操作して一方通行の肌に触れた瞬間、冷氣が反射された。

「冷氣を発生させる能力か……ここにも学園都市の能力者がいるのかア？」

と、一方通行はチョーカーのスイッチを押して声に出して自分の考えを口に出した。

しかし、彼の考えは外れてしまった。

なぜなら、現れたのは蒼い衣服とリボンをつけて、背中に絵本に出てきそうな妖精の翼を持った妖精もどきがいたのだから。

「……、なんだア、このクソガキは。コスプレが趣味な幼児ですかア？」

「そのアンタ、あたいと勝負しなさい！」

瞬間、アクセラレータ一方通行はどう判断するか迷ってしまった。

目の前にはコスプレをしたインデックス並みの幼児体系の少女がいる。しかも、行き成り勝負を仕掛けられてしまった。

アクセラレータこの場合、一方通行が下した判断は、

「よし、こんなコスプレ少女はほおって置いて、まともな思考を持ったヤツを探しに行くとすつかア」

どうやらほおって置くようだ。

「このあたいを無視するなんていい度胸じゃない！」

「……、あアもオナンドよクソガキ。俺はあいにく忙しインだよ！ お守りなら別の誰かにやってもらいな」

「あたいは氷の妖精チルノ。その白髪、最強のあたいと勝負しなさい」

「ハア！？ ンだアその理不尽な我が侘はア！？」

「アンタさつきあたいの氷を弾き返したじゃない。アンタも強いって事でしょ？ アンタを倒したらあたいはまた強くなれるわ」

「くっだらねエな。他ア当たれ。ンじゃアな」

チルノと名乗った妖精？ アクセラレータは一方通行に勝負を挑むが、アクセラレータ一方通行は戦いよりも、ここがどこなのか知りたいため、杖をつきながら森を出て行こうとする。

「なら無理矢理でも戦わせてあげる！！」

——氷符「アイシクルフォール」——

瞬間、突然出現した氷の弾幕が一方通行を襲う。

アクセラレータ

アクセラレータ

だが、一方通行に氷の弾幕が突き刺さるよりも早く、一方通行はチョーカーのスイッチを押して能力使用モードにすると、肌に触れた氷の弾幕のベクトルを操作してチルノに当たらないよう、氷の弾幕を弾き返す。

（なんだアこのカードは？ どっかで見たことあんよオナ氣イスンだけどなア……）

アクセラレータ

すると一方通行はポケットに違和感を感じ、ポケットを探ると、何枚ものカードがポケットに入っていた。

それは、さつきチルノが使っていた「スペルカード」と言うものだった。

アクセラレータ

使い方をさつきのチルノを一目見て覚えた一方通行はスペルカードを前に突き出し、使用宣言をする。

しかし、氷符「アイシクルフォール」によって生み出された氷の弾幕はさらに数を増やし、一方通行に突っ込む。だが、それよりも

アクセラレータ

先に一方通行のスペルカード使用宣言のほうが早かった。

——術符「求めるは焼原>>>・紅蓮」——
くれない

アクセラレータ

スペルカード使用宣言と同時に一方通行の前方に魔法陣が構築されていき、魔法陣が構築を終了した瞬間、魔法陣から無数の炎弾が放たれ、氷の弾幕とぶつかり合い、相殺する。

「ナルホドなア。使い方は覚えた。……オイ、そのガキ。チルノとか言ったなア。最強はオレだけで十分だ。ってエかオマエ、本当に強いのか？ さつき氷の弾幕を俺が出した炎弾で相殺してたとき、ムチャクチャビビってただろオが。テメエ、そんなンじゃア最強は名乗れねエぞ。今からオレが本当の最強ってエヤツを見せてや

ンよ」

「あたいはサイキョーなの！ サイキョーなんだよ！ あたいをばかにしたこと——こーかいさせてあげるんだから！！」

「やってみなア三下ア！！」

——術符「求めるは雷鳴>>>・稲光^{いづち}」——

——氷符「アイシクルマシンガン」——

^{アクセラレータ}一方通行がスペルカード使用宣言をすると、術符「求めるは焼原>>>・紅蓮^{くれなひ}」と同じような魔法陣を構築すると、中心から雷のような弾幕が無数に出現し、チルノがスペルカード使用宣言をするとチルノの上部に無数の氷柱^{こしゅう}が出現する。

次の瞬間、雷の弾幕と氷柱がぶつかり合う。さきほどのように相殺しあったが、流れ弾が^{アクセラレータ}一方通行に直撃しようとする。

「やった！ あたいの勝ちね！」

チルノは自分の勝利を確信していた。だが、1つだけミスを犯してしまった。

それは、^{アクセラレータ}一方通行の能力を知らないこと。

^{アクセラレータ}流れ弾が一方通行に直撃した瞬間、流れ弾は反射され、チルノの真横にあった木に穴を開ける。

「まだまだ甘エ^{あめ}なア三下。そんなんで最強名乗ってンじゃねエぞ！」

——術符「我・契約文を捧げ・天空を踊る光の魔獣を放つ」——
瞬間、光の文字が空間に刻まれて、^{アクセラレータ}一方通行の上部から不定形の犬のような獣が出現し、チルノに放たれる。

——冷符「瞬間冷凍ビーム」——

チルノも、^{アクセラレータ}一方通行に負けじと、スペルカードを発動させ、冷凍

ビームのようなものが放たれる。

不定形の犬のような獣は真っ直ぐ冷凍ビームに突っ込み、押しのけようとするが、氷付けにされてしまい、碎ける。

——術符「炎の女神が、我らに力を貸し、フレイヤ・バースト」

「これならどオだア!？」

空間が凝縮されたような感覚が両者に襲うと、強烈な炎の砲撃とも言えるような業火が冷凍ビームを押してゆく。

瞬間、爆発が起こった。

第一章 01 最強の少年と最後の希望は楽園へ…… The Imagine

「主人公設定」にスペルカードの名称と効果を追記しました。

第一章02 最強の少年と最後の希望は楽園へ……

The Imagine

結構短いですが、更新しました！

それでは、どうぞ！

——捕縛「光の王が無数の時を編み、ライト・キャンサー」——
——術符「求めるは光陣>>>・縛呪」——

煙が充満する中、アクセラレータ一方通行は目の前で切られた印と魔法陣から生まれた光の縄と光で編まれた網でチルノを拘束する。

拘束されたチルノは暴れだすが、身動きできず、すぐに暴れるのをやめてしまう。

アクセラレータ一方通行はチョーカーのスイッチを押してバッテリーの消費を通常モードにすると、

「ああ……、その網と縄、すぐ消えるぜ。ってエワケでオレは行くぜ」

——疾速「我・契約文を捧げ・大地に眠る悪意の精獣を宿す」——

瞬間。

アクセラレータ

一方通行の全身が白くきらめき……

加速した。

杖と荷物を手に持つと、現在いる森から出ようと、もの凄いスピードで森を駆け抜けた。

ちなみに、チルノの拘束が解かれたのはアクセラレータ一方通行が森を出て1時間経ったあとの出来事だったことはまったくの余談である。

森から2キロほど離れた場所、アクセラレータ一方通行は先ほどまできらめいていた体を停止させて、携帯電話をポケットから取り出す。

画面を開き、当麻、インデックス、土御門に電話をかけるが、やはり圏外となっていた。

アクセラレータ携帯電話をポケットにしまい、一方通行は現在の状況を確認する。ここは学園都市ではないどこかだということ。

魔術師に似たなにかが存在すること。

「スペルカード」と呼称される異能のチカラを開放するカードがあるということ。

今のところ、分かっていることはコレだけである。

それにプラスでこの中は結界の中だと分かった。理由は土御門にこんな結界を張ってもらって体術の練習をしてたからであるが。

（つち……、情報が少なすぎる。まア、結果として分かることは1つ。コレは絶対に異能のチカラが関わってんな）

アクセラレータと、一方通行はどんな異能も打ち消す右手を持つ不幸な親友と同じようなことに巻き込まれたかもしれないという不安に駆られながらも、冷静に今分かる結果を挙げてみる。

（しかし、バッテリーはどやって充電すんだよ……。こんな学園都市の『外』でバッテリーの確保は——そオいや、スペルカードエレクトロマスターに電撃使いみてエに電気を発生させるよオなのあつたなア）

自分の能力使用のためにバッテリー充電をしたいらしい一方通行アクセラレータだが、取り出したスペルカード“術符「求めるは雷鳴>>>・稲光づち”は魔法陣を構築して、構築された魔法陣の中心から電撃の弾幕を張るということを思い出し、一方通行はバッテリーの充電を断念する。

まあ、バッテリーの充電は能力使用モードでも、50分は使えるため、しなくてもあまり変わらないだろう。

今はこの辺りを空から見回したいのか、一方通行は、スペルカードを取り出す。

——飛翔「我・契約文を捧げ・空を舞う漆黒の鳥獣を宿す」——

瞬間、一方通行が“疾速「我・契約文を捧げ・大地に眠る悪意の精獣を宿す」”を発動させたときのように体がきらめく。ただ、黒くきらめいているところは全く違うのだが。

空に飛翔した一方通行は、空中からざっと、周りを見渡す。見えたのは人里、竹林、鳥居と神社、さっきまでいた森だけだった。

人がいそうなところは考えなくとも、人里と神社に絞られるだろう。

一方通行は最初、人里に向かおうと考えた。しかし、神社にいる人間が人里にいる人間よりこの世界のことなどは詳しいだろうと考えを変えてみる。だが、まずは人里で情報を集めてから神社に行くのも悪くはない。それに、ぱつと、空から見ただけで神社への道はわからない。そのため、一方通行は人里に向かうことにした。

人里に行くことを決めた一方通行は、地上に降り立ち、道のど真ん中に置いた荷物を杖を持っている右手とは逆の左手に持つ。

「確か人里はここを真っ直ぐ行けばイインだよな。そんじゃア、行くとしますか」

杖をつきながら一方通行は人里を目指し、歩いていった。

日が沈む手前、“疾速「我・契約文を捧げ・大地に眠る悪意の精獣を宿す」を使いながらも人里に着いた一方通行は、

アクセラレータ

「おいおい、ドラマや時代劇とかでよく見るよオナ村の集まりじゃアねエか……」

と、ポツリと人里を見た感想を小声で漏らした。

アクセラレータ

確かに見た感じ、一方通行が漏らしたとおり、ドラマや時代劇で見るような村の集まりという感じで、彼が言ったことはあながち間違っていないだろう。

それに合わせているのかは知らないが、住民たちの服装は和服である。

「……ってエオレは江戸時代にタイムスリップしたってエワケですかア？ 当麻みてエに不幸な目に現在進行形で遭ってンとか言うんじゃないエだろオナ？」

と言いながらも、まずはどうやって神社への道のりを聞くか……それよりも、今日の宿を確保するかという問題をどうやって解決しようかと思案している一方通行だった。

アクセラレータ

それよりもまずやっておきたいことは1つ。

……一刻も早く自分に向けられる注目を別のものに注目させたい。

とつとつこの視線を別のモンに注目させてエ……！ と内心思いながら、一方通行はこの状況を何とかしようと、考えを脳内に張り

アクセラレータ

巡らせようとする。

そのときだった。

アクセラレータ

一方通行の前に彼と同じアルビノの特徴である白い髪と紅い双眸そうほうを持った女性が目の前に現れた。

「つとオ……アンタは？ オレになんか用でもあんのか？」

「いや、見ない顔だと思ってな。私は上白沢かみしらさわ慧音けいね。きみは？」

「オレン名は一方通行だ。よろしくな、上白沢さん」

「慧音で構わない」

「ンじゃア慧音さんで。ああ……そオだ。なア慧音さん」

「何だ？」

「悪リインだけどさ、今日1晩アンタの家に泊まらせてくれねエか？ オレ、この辺りに来たのは——ってエか、こんなバカデカい結界ン中に来たンは初めてなンだよなア……」

「ということは外来人か……。わかった。一方通行アクセラレータ、きみはここがどんな場所か知っているかい？」

行き成りの質問。

アクセラレータ

一方通行は慧音に行き成り質問されてもまったく戸惑わないで、質問に答えようと、口を開く。

「いや、全然知らねエ」

「やはりな。まあ、まずはついて来い。それから話をしよう」

「そオだな。ンじゃ、1晩だけだけど、よろしくな慧音さん」

アクセラレータ

「こちらこそ、一方通行」

慧音が左手を差し出して、握手を求めてくる。一方通行アクセラレータの右手の

杖を見てのことだろう。

アクセラレータ

一方通行は左手に持っている荷物をすべて置き、慧音と握手を交わす。

第一章02 最強の少年と最後の希望は樂園へ…… The Imagine

「主人公設定」にスペルカードの名称と効果を追記しました。

特徴的な白い髪と肌に紅い双眸を持ち、首につけているチョーカ
ー型の電極をつけ、黒を主体に雷を模したような鋭い白線をいくつ
もデザインされたシャツを着用し、現代風なトントンファアのような
杖をついている少年、一方通行は先ほど出逢った女性、上白沢慧
音に付いていき、彼女が住んでいる寺子屋に行く、らしい。

らしいというのは、実際に見ていないために、一方通行が確認が
持てないからだ。

その寺子屋に向かう合間、慧音は彼にこの結界の中——げん 幻
そとぎょう 想郷のことやこの世界に住む妖怪と呼ばれる人間とはかけ離れた存
在のことを簡単に説明してくれた。

正直、彼は驚いた。

一方通行は長年住んできた科学がちんすのつりよく発展している世界とは違い、非
カルト科学的が存在する世界なんて見たことも聞いたこともなかったから
だ。

（まアでも、チルノだっけか？ あのコスプレ少女。アイツも妖怪
…… ってエよりは、妖精に近かったよオナ気イスンだけだなア……
こオいうモンは魔術しか信じてなかったんだが、信じるしかねエな）

と、考える間にも慧音と一方通行は慧音が経営している寺子屋に
着いた。

見た感じ、テレビや本、写真で見たことあるような木造建築の小
学校のような外見だ。アクセラレータ 一方通行は最初、ボロボロの小屋を思い描い
たがそんなことはなく、ぱっと見ただけでも分かるようなかなり材

質のいい木材を使っていることが分かる。

「ヘエ……予想してたのたア全然違っじゃねエか」

「どんなのを予想してたんだ？」

「ンまア、ボロボロの小屋、とか？」

瞬間、寺子屋から誰かが出てきた。

「あ、慧音が帰って来た！　ってミサカはミサカは慧音を迎えに来てみたり」

アクセラレータ
その声は一方通行がよく知っている声だった。

彼は声が聞こえた方に視線を向ける。

そこにはアホ毛がチヨコン、と立っている茶色い髪に同じ色の双眸を持ち、空色に水玉模様のキャミソールの上から男物のワイシャツを着用している一方通行が守るべき対象の1人の少女。

ラストオーダー

心なトコロ

「——打ち止め！　どオしてオマエが幻想郷に居るンだア！？」

アクセラレータ

「あーっ！　一方通行だ！　ってミサカはミサカは数時間ぶりに逢ったあなたに抱きついてみる」

ラストオーダー

打ち止め。

アクセラレータ

それが今、一方通行に飛びついてきた少女の名前だ。

アクセラレータ

ラストオーダー

被害者である一方通行は、打ち止めが飛びついてきた衝撃でバランスを崩し、地面に倒れる。

「オマ……ッ！　何でここにインだよ！？　病院でミサカ10032号の軍用ゴーグル奪^とってあんなにハシャいでたたるオが！ー」
「それがミサカにも分からないの、ってミサカはミサカは本当のこととをあなたに言ってみたり。その後、10032号にゴーグル返し

て、病院を歩き回ってたら雑音ノイズが走って、そしたらいつの間にか幻想郷に来てて、慧音に助けてもらったの、ってミサカはミサカはここに来た経緯をあなたに説明してみる」

「ナルホドなア……。悪リイな慧音さん。このクソガキを助けてくれて」

「いや。それくらいどうって事はないさ。それより、早くあがつてくれ。夕食の支度をする」

「何からナニまで、本当オに悪リイな」

「ありがとう！　ってミサカはミサカは感謝のお礼を述べてみたり」

一方通行は打ち止めに「退いてくれ」と言っと、立ち上がり、打ち止めをつれて寺子屋に入る。

寺子屋の中は一言で言うとな随分昔の時代にあった学校だ。

一方通行は大方予想できていたため、驚かないが、隣に居る打ち止めは初めてみる寺子屋に興味津々のようだ。

「おー！　ここが寺子屋っていう場所なのか、ってミサカはミサカは感心してみる」

「ってエ……。オマエ、寺子屋見たことねエンかよ。っつーかここ見てねエンかよ？」

「見てないよ、ってミサカはミサカは断言してみたり。だってミサカ、ずっと玄関で慧音のこと待ってたもん、ってミサカはミサカは言ってみたり」

「……あつそオかよ」

なんとも意外な発言を隣に居る活発な少女の口から聞いた一方通行はそれ以上何も言わずに、杖をつきながら歩く。

その間にも一方通行は自分の能力以外の力を手に入れて、その力の分析をしている。アクセラレータ

（スペルカードねエ……使ってみて、使用宣言しねエと使えない代物らしいな。コイツを使ってもベクトル変換はできるし、まあそこらは問題にしくてもイイだろ）

と、一旦考えを中断させる。

寺子屋を抜け、和風の部屋が見えた。見た感じ、慧音が住んでいる場所だろう。

その後、慧音が食事の支度をしに、台所へ向かった。ラストオーダー 打ち止めも簡単な手伝いをしようと、慧音について行った。

その間一方通行は首もとのアクセラレータチョーカー型電極のバッテリーの確保をするか考えていた。

バッテリーの残量はあと二日は何とかなるだろうが、それ以上時間が経てばバッテリーの残量はなくなる。

今のところどうやってバッテリーの確保をするかは決まっていな
い。というより、手段がない。

「……バッテリーの複製でもしてもらおオカ？ 丁度設計図は持ってたしな。そおいや、ヘウンキャンセラ『冥土返し』に設計図返すの忘れてたな。ンじゃ、学園都市に戻ったら渡すか」

ポケットから取り出したチョーカー型電極とバッテリーの設計図データの記録が入っているUSBメモリを軽く放り投げながら一方通行は
呟く。アクセラレータ

それと同時に、幻想郷に学園都市並みの技術力を持ったヤツな

か居ンのか？ と疑問にも思っていた。それは慧音に聞くことにしたようだが。

まア、どオせいねエだろ、と一方通行は思う。
ホワイトシルバー

白銀に塗られた拳銃、ベレッタM92を取り出し、マガジン弾倉に入っている銃弾の数を確認する。

四発。

持って来た予備のマガジンに入っている弾丸も含め、三十四発。自分とクソガキを守るのに使える。もし自分を守れなくても拳銃コレはクソガキを守るために使える。

だが、自分を守るのにはスペルカードを使えばいい。

このせかい幻想郷に来て、手に入れた力を使えばいい。

一度使ってみて、殺傷力は無いに等しいことが分かった。だから誰も殺さなくて済む。

「はン。随分丸くなつちまってンじゃねエかよオレ。一万人も殺したオレが言うことかよ……」

ポツリ、とひん呟く。

昔の彼なら笑ったことだろう。

と、そこで考えを遮断する。

隣に、守るべき少女が突然現れたからだ。

大方、食事の支度ができた、とでも言いに来たのだろう。

「食事の支度ができたよ、ってミサカはミサカはあなたに報告してみる」

「あいよ。ソンじゃ行きますかア」

杖を握りその場から立ち上がった少年は、そよかぜ微風に髪を撫でられながらその場を後にした。

食事は予想通り和食だった。

玄米に味噌汁、焼き魚など、ごく普通の和食が卓袱台ちゃぶだいの上に三人分置かれていた。

その手前には箸が置かれてあった。

「予想通り和食ですか。まア、見た感じそオなだけどな」

「あのね、ミサカは焼き魚を作ったんだ！　ってミサカはミサカは初めて料理をした感想を言ってみたり」

「ふーん」

「何か言ってくれないとミサかはつまんない！　ってミサカはミサカはとつても寂しい思いをしてみたり！　褒めて褒めてーっ！　ってミサカはミサカは駄々をこねてみる！」

そう言っラストオーダーて打ち止めアクセラレータは、一方通行の脚にしがみつく。

一方通行は打ち止めがしがみついている脚をブンブン、と振るって、

「うるっせエぞクソガキ！　ちったア黙ってるー！」

「こらこら一方通行、子どもはいじめるものじゃないぞ」

二人の会話に慧音が介入してくる。

教師ラレータってエなア、こんな些細なケンカにも介入すんだな、と一方通行は思った。職業柄、こういうのは止めるものか、とすぐに考えを纏めてしまったが。

「……離れろ、打ち止めラストオーダー」

「やだーっ！　ってミサカはミサカは拒絶してみる！」

「どオしてだア？　そんならメシ食えねエだろオがよオ」

「そっか、ってミサカはミサカはあなたの言葉に納得してみたり」

アクセラレータ

ラストオーダー

一方通行の脚から離れた打ち止めは残念な表情をしながら、自分に用意された食器が並べられた卓袱台に座る。

アクセラレータ

じょうず

ようやく少女から離れてもらい、自由に身動きが取れるようになった一方通行も杖を上手に使い、卓袱台の前に座る。

「いっただつきまーす！　ってミサカはミサカは手を合わせてみた
り」

「いただきます」

「……いただきますアす」

機嫌が悪かった先ほどとは違い、元気になった打ち止め、夕食を
アクセラレータ
アクセラレータ
用意した慧音、いろいろと疲れてしまった一方通行があいさつをする。

アクセラレータ

ラストオーダー

一方通行は打ち止めが作ったと言っていた焼き魚をパクリ、と少し食べてみる。

アクセラレータ

焼き加減、味付けなども丁度いい味付けで一方通行は、

「美味エな」

と、評した。

ラストオーダー

「以外にやんじゃねエかよ、オマエ。見直したぜ打ち止め」

「確かに美味しいな。焼き加減や味付けも丁度いい」

「ありがとう！　ってミサカはミサカは褒めてもらって調子に乗って
みたり！！」

ラストオーダー

二人に褒めてもらって打ち止めは調子に乗って上機嫌になっている。
アクセラレータ

そんな中、一方通行は気になることが、ふと思いついた。

ラストオーダー
打ち止めに聞かなければいけない重要なことだ。
いまいるせかい
幻想郷で自衛するには。

ラストオーダー
「なア打ち止め……」

「なに？　ってミサカはミサカは首を傾^{かし}げてみたり」

「オマエ、今能力——^{レディオノイズ}欠陥電気、使えるか？」

彼女が今、自分が持っている能力、^{レディオノイズ}欠陥電気を使えるか？
^{アクセラレータ}一方通行はそう聞いた。

「ちょっと待って、ってミサカはミサカはあなたに言いながら計算
を試してみたり」

計算をしているということは超能力を使うということだろう。

学園都市の超能力者は計算をして超能力を駆使用する。

たとえば、知り合いの移動系の『^{テレポート}空間移動』保持者の^{テレポーター}空間移動者、
^{しらいくろこ}白井黒子や同じ組織『^{ムーブポイント}グループ』に所属している『^{ムーブポイント}座標移動』保持
者の^{ムーブポイント}座標移動者、^{むすじめあわき}結標淡希は十一次元の計算をする。

^{じぶん}一方通行はベクトル変換のための複雑な計算をしてベクトルを
換する。

全ては計算。

計算によって超能力は発動するのだ。

すると、^{ラストオーダー}計算が終わった打ち止めから微弱な電気が発生する。
^{レベルスリー}強能力の^{レディオノイズ}欠陥電気が発動した瞬間だった。

^{ラストオーダー}打ち止めが^{レディオノイズ}欠陥電気を発動したところを見た慧音は、

「能力持ちだったのか、^{ラストオーダー}打ち止め」

「能力持ち？　幻想郷での超能力者の呼称か。……なア慧音さん。
アンタも能力持ちみてエなんだが？」

「そうだ。私の能力は“歴史を隠す程度の能力”だ」

(……程度？　ンだアそりゃア)

程度、という言葉に引っかけたものの、アクセラレータ一方通行は自分の能力について話し始める。

「オレも能力持ちだ。能力名は『アクセラレータ一方通行』、自分の肌——と言うより、肌を覆う膜——に触れたモノを反射するんだ。こっちの表記で言うなら“必要なモノ以外の体表面に触れたモノを反射する程度の能力”ってエトコだな。ま、コイツアデフォルトなただけだな」
「ミサカの能力はね、『レイオノイズ欠陥電気』って言って、電気を操ったり発したりする能力なんだ、ってミサカはミサカは慧音に説明してみたり」

「簡単に言えば“電気を発したり操ったりできる程度の能力”だな。コレで説明は終わりだぜ」

慧音は食事を勧めながらもアクセラレータ一方通行や打ち止めの能力についてさまざまな質問をして、二人は戸惑いながらも、慧音の質問に詳しく答えていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7997n/>

東方墮翼記

2010年10月17日22時19分発行